

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：太田 真揮 所属：あわら市芦原小学校

記録日：平成31年2月20日

キーワード：自己肯定感を高める ICT 機器の活用、人と関わろうとするコミュニケーション意欲の向上

【対象児の情報】

1 学年

小学校5年生（5年生通常学級と交流）

2 障害名

知的な遅れ

3 WISC-IVの結果（2017/2/18 一部参考値）

	得点
言語理解指標(VCI)	53
知覚推理指標(PRI)	62
ワーキングメモリ指標(WMI)	63
処理速度指標(PSI)	70

4 障害と困難の内容

- ・知的な遅れがある。→交流学級での学習活動には個別の支援を必要とする。
- ・他の児童とのコミュニケーションに自信がもてない。
→大人を介したコミュニケーションになることが多い。
- ・過去の失敗や不安に思ったことが心に残りやすく、払拭するのに時間がかかる。
→苦手意識をもった活動集団・活動場所には参加できなくなってしまう。
- ・初めての活動や行事に対する不安感が強い。
→活動をあきらめたり、その場から離れたりすることがある。

【活動目的】

1 当初のねらい

（1）他者とのコミュニケーションに喜びを感じ、自分から考えや思いを伝えようとする。

（2）A：自分の考えや思いを分かりやすく伝える方法を身につける。

B：これまでの成果を実感し、不安なことや初めてのことにも挑戦する姿勢を身につける。

※活動開始当初にはAを設定していたが、コミュニケーションスキルの習得以前に、意欲を重点的に身につける必要があると感じたためBに変更した。

（3）初めての活動に安心して取り組むことができるように、不安なことを教師に伝えたり、分からないことを調べたりする方法を身につける。

2 実施期間 平成30年5月から平成31年1月まで

3 実施者 太田真揮

4 実施者と対象児の関係 特別支援学級担任

【活動内容と対象児の変化】

1 対象児の事前の状況

<特別支援学級での様子>

- ・国語、算数、社会、総合的な学習の時間、道徳、学活の学習を行っている。
- ・日常会話において多少幼さはあるものの、問題なくできる。
- ・こつこつと学習に取り組むことができる努力家である。
- ・学級での係活動や役割に責任をもって取り組むことができる。
- ・教師や他の児童の良い行動をモデルにして、学習や話し合いをすることができる。

<交流学級での様子>

- ・書写、理科、体育、図工、家庭、音楽、外国語の学習を行っている。
- ・こども園時代からのつながりがある児童が多く、優しく接してもらうことが多い。
- ・他の児童から話しかけられたり、手助けしてもらったりすることが多い。
- ・交流学級では支援員が付き添う。支援員が付き添うことができない場合には、交流学級での授業に参加できなくなってしまう。
- ・話し合いや発表等では自信がもてず、支援者が促しても尻込みすることが多い。
- ・話題や自信の無さから、受け身で短いコミュニケーションになりやすい。また、支援者を介したコミュニケーションになりやすい。

<初めての行事や活動前の様子>

- ・初めての活動や一見してできないと感じた活動は、その場所から勝手に離れてしまったり、固まってしまったりすることがある。
- ・体育的行事では周囲の児童の技能が向上し、その差を感じて一緒に活動することができなくなってしまうことがある。
- ・「5年生の自然教室は行かないから！」と教師に伝えるなど、自然教室・スキー教室など未経験の行事に強い不安感を抱いている。
- ・初めての活動に対して不安が強く、最初から活動をあきらめてしまったり、活動場所から逃げるように離れたりすることがある。
- ・一度、苦手意識をもつと修正するのに時間がかかり、参加が難しくなってしまう。



できないことがあると、固まってしまう

2 活動に取り組むにあたっての支援者間での連携と役割分担

対象児のコミュニケーションスキルを高め、多くの人と積極的に関わり、新しい活動に対しても前向きに取り組む姿勢を育てるため、周囲の支援者の役割を明確化した。

支援者	支援の場	支援内容
特別支援学級 担任 (研究実施者)	特別支援学級 学校行事	学校生活における不安や悩みを共有 不安の軽減や解決方法を共に探る 主な支援者として、支援者間連携の中心的な役割を担う I C T 機器を効果的な使用について考察する

保護者	家庭	家庭生活の中で、対象児の悩みや不安の共有 連絡帳などを通して担任と情報共有・解決方法を探る I C T 機器利用のモデルとなる
特別支援学級 支援員	特別支援学級 交流学級(引率)	学校生活全般での支援・見守り 学校行事・交流学級での対象児の様子を写真や動画で記録 コミュニケーションのモデルを示す 過支援にならないように配慮
交流学級担任	交流学級 学校行事	交流学級集団の一員として、対象児を指導 集団の中での役割や活躍の場を提供 コミュニケーション面で、特別な配慮を行うことはしない

3 活動の具体的内容

(1) 教師とメールで気持ちを伝え合う

目的

- ・自分の気持ちを言葉にして、他者に伝えることに慣れる。
- ・メールのやり取りを通して、気持ちを伝え合うことの良さや喜びを感じる経験を重ねる。

内容

- ・アプリ「ByTalk for School」を介して、学校や家庭での出来事について、教師とメールのやり取りを行う。
- ・保護者にもメールグループに入ってもらい、対象児のコミュニケーションのモデルとなっていく。



ByTalk for School

(2) 自分が頑張ったこと・うれしかったことを振り返り、写真日記にまとめる

目的

- ・自分の頑張ったり喜びを写真や動画で振り返り、肯定的な感情を繰り返し得ることができるようにする。
- ・写真日記を継続的に書くことで、成果を実感し、次の活動への意欲につなげる。

内容

- ・行事や交流学級での活動で、対象児が頑張っている場面や笑顔を見せている場面を写真や動画で記録し、いつでも振り返りを行うことができる環境を整える。
- ・振り返りの時間に、対象児が一番気に入った写真を選び、アプリ「Palu ～手書き共有カレンダー～」で写真日記を作成する。
- ・作成した写真日記は、対象児が見せたい人にいつでも見せてよいというルールにし、保護者にも学校の様子として見ていただくようにした。



写真



Palu

(3) 分からないこと・不安なことを事前に調べる・まとめる・考える

目的

- ・初めての活動について、調べたりまとめたりする活動を通して、具体的なイメージや見通しをもち、不安感を軽減することで、活動に参加することができる。
- ・初めての行事のしおりを特別支援学級の担任教師と一緒に作成する中で、不安な事や分からない事を共有し、

参加する方法を一緒に考えることができる。

内容

- ・初めての活動や行事について、インターネットで調べる。具体的なイメージをもちやすいように、画像検索を優先的に行う。
- ・対象児が初めて経験する行事の前に、アプリ「MetaMoji Note」を用いて、対象児専用のしおり作りを行う。
- ・しおり作りは特別支援学級担任と一緒に作成し、作成する中で不安や分からないことを共有し、より意欲的に参加できるような方法を共に考える。



Safari



MetaMoji Note

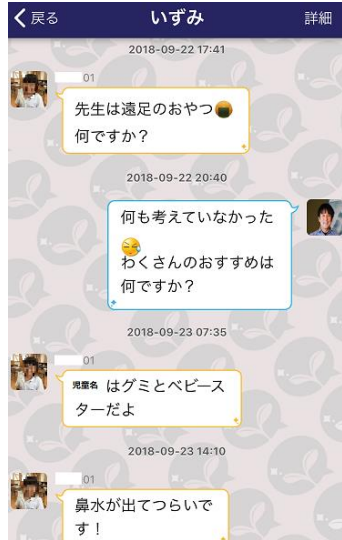
4 対象児の変化

(1) メール内容の変化と表現方法の変化

アプリ「ByTalk for School」で、対象児と担任教師がメールのやり取りを行った。活動を開始した6月は、教師からのメールの問いかけにオウム返しで答えたり、スタンプのみを送ったりすることが目立った。継続的に教師から問いかけを続けたが、このような状態は夏休み前まで続いた。

どのようなやり取りをすればよいか想像しにくいことが原因ではないかと考え、一番身近な存在である母親にメールのやり取りのモデルになっていただくことにした。夏休み明けの9月から母親にもメールのグループに入ってもらい、教師とメールのやり取りを行った。また、対象児がメールを送る際に、母親と一緒に文章を考えてメールを送るようにしてもらった。そのような支援を行うことで、教師に質問したり、報告したりする内容のメールが増えてきた。12月には自分が楽しみにしているクリスマスについて教師にメールを送るなど、自分で伝えたいことを表現することに慣れてきた。

<「ByTalk for School」でのメールのやり取りの推移>

5月	9月	12月
		
5月 オウム返し・スタンプ	9月 母親と一緒にメールを開始	12月 自分でメール

1月以降は、対象児がメールを送ることが少なくなり、伝えたいことや困っていることなどがあると、直接担任教師や支援員に伝えてくることが多くなった。また、交流学級での困りごとは、直接交流学級の担任に伝えることができるようになった。

(2) 写真・動画データの蓄積と写真日記の取り組み

授業ごとに主な支援者となる教師・支援員が iPad を携帯し、対象児が頑張りを撮影し、写真・動画データとして蓄積した。活動を始めた当初は、自分が撮影されることに対して恥ずかしがる様子が見られたが、休み時間に撮影された写真や動画を見返すなど、自分の行動について関心を高めているようであった。



休み時間に活動動画を見る

1 月末時点で、対象児のがんばった姿や笑顔が 600 以上、写真や動画として iPad に保存されている。対象児が iPad を携帯し、自分の頑張りを繰り返し見ることで、より高い目標に向かって取り組もうとする意欲が養われた。

<対象児の自己肯定感を高め、より高い目標を設定したエピソード>

芦原小学校では、春と秋の 2 回、全校児童でマラソン大会を行っている。走る距離は学年ごとに定められており、5 年生はマラソンコース 4 周（2000m）を走る。春のマラソン大会では、対象児は走力・体力面を考慮し、マラソンコース 3 周（1500m）を走ることに決めた。対象児も保護者もその目標を走り切ることで十分であるという認識をもっているようだった。

自信がないので
3 周走ります



春のマラソン大会では、対象児は目標としていたマラソンコース 3 周（1500m）を完走することができた。その時、交流学級の児童が最後の 1 周を応援しながら走ってくれた。マラソン大会後、みんなと一緒にゴールした動画を何度も繰り返しうれしそうに眺める姿がみられた。大会の振り返りを日記に書かせたところ、「次は、4 周（2000m）走ります。みんなと一緒にゴールできるように練習したい。」と記し、秋の大会に向けてより高い目標を定め、努力しようとする姿勢が見られた。



マラソン大会の動画の一場面
→友達と一緒に走ってくれ動画を繰り返し視聴した

秋のマラソン大会では、他の 5 年生と同じマラソンコース 4 周（2000m）にチャレンジし、見事完走することができた。他の児童と一緒にゴールすることはできなかったが、ゴール後「4 周走り切れた。」と充実した笑顔を浮かべていた。



4 周（2000m）
最後まで
走り切った！

写真日記の活動は、自立活動の時間に一日の振り返りとして行った。その日撮影した写真の中から、お気に入りの写真を見つけて、スタンプを貼ったり、コメントを記入したりして、写真日記としてまとめた。

活動を始めた 5 月には、学習活動の様子や作った作品などの写真を選んで、日記にまとめるだけだった。6 月・7 月に入ると、そのような写真に「がんばりました」「作りました」などの肯定的なコメントをつけることが増えた。さらに、9 月・10 月に入ると、交流学級の児童と一緒に学習している時の写真や行事の写真を選ぶことが増えるとともに、家庭や休日の出来事なども自主的に日記にまとめて、教師に見せてくるようになった。

<活動を始めた5月の写真日記>

活動内容

スタンプ

の表現が目立つ



<6月・7月の写真日記>

「がんばりました」

「作りました」

などのコメントを
書くようになる

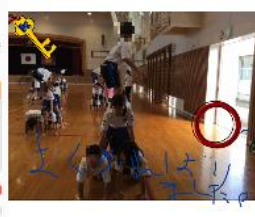


<9月の写真日記>

行事の練習

交流学級での様子

について積極的に
書くようになる



<10月の写真日記>

家庭の様子

休日の出来事

なども日記で知らせてくれる
ようになった



アプリの月間表示画面により、対象児の頑張りが積み重なっていく様子が一目で見て分かるようになり、これを繰り返し見ることで自己肯定感を高めることにつながった。また、9月以降、交流学級の友達と一緒に活動する写真を選ぶことが増えたことから、交流学級の児童とのつながりに意識を向けていく様子も読み取ることができた。

写真日記を教師や保護者に見せることで、頑張る姿を褒めてもらい、さらに自己肯定感を高めることにつながった。



写真日記の月間表示画面

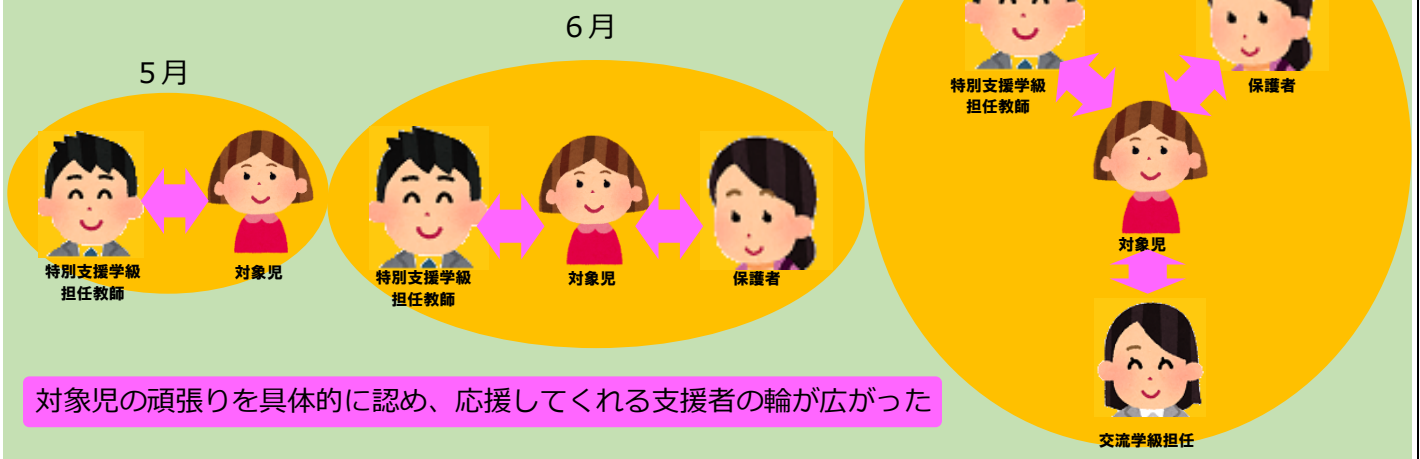
→対象児のポジティブな姿でいっぱいになった

<対象児が写真日記を公開し、自己肯定感を高めていくエピソード>

5月は、日記を書く活動には意欲的に取り組むものの、はずかしがって担任教師以外にはだれにも見せようとしなかった。6月、母親に日記の公開を始めた。対象児が自分から日記を見せることをはずかしがっていたので、担任が下校時に母親に見せるようにした。対象児は担任が母親に日記を見せる様子を近くではずかしそうに見ていたが、表情は明るく嫌がっている様子はなかった。一番身近な存在である母親に学校の様子を話したり、褒めてもらったりすることが以前にも増して多くなった。母親からも連絡帳で「学校の様子がよくわかってうれしいです。頑張っているのがよく分かります。」と書いていただき、対象児・担任教師・母親が学校での様子や頑張りを共有することができた。

7月に入り、「交流学級の担任の先生にも見てもらったらどうかな？」と促すと、はずかしがる様子もなく交流学級の担任にも見せるようになった。交流学級の担任とは、写真をもとに学校生活について会話のやり取りを行うことができ、対象児童もうれしそうだった。

<写真日記を介した支援者とのつながりの拡大>



(3) 行事の事前調べとしおり作り

今年度、初めて宿泊を伴う学校行事である自然教室があった。4月に対象児に自然教室があることについて話をしてみたところ、不安感から「行かない。」という返答だった。

そこで、アプリ「MetaMoJi Note」を用いて、自分専用のしおり作りを行った。しおり作りをしながら、担任教師と不安な事や分からないことを共有し、ともに解決策を考えることで、「参加しない」という考えから、「この方法なら参加できる」という考え方に変わってきた。

<対象児と担任教師がしおり作りをする中で、参加可能な方法を探る エピソード>

学級担任「10時30分からカヌー体験だよ。」

対象児 「カヌー？しない。」

学級担任「しおりに入れる写真を探したいから、自然の家のホームページで写真見てみよう。」

対象児 (ホームページの写真を見ながら)「カヌー、できないと思う。落ちそうで怖い。」

学級担任「落ちることが怖いんだね。絶対に落ちない救助の船に先生と一緒に乗るのはどう？」

対象児 「それなら…(できるかも)」

対象児と教師がやり取りをしながらしおりの作成を行うことで、対象児の不安感を具体化するとともに、他の児童と同じような活動が難しい場合でもできるだけ近い活動ができるように担任教師がアドバイスすることができた。

対象児は話し合いを通して具体的な見通しをもつことができ、自然教室に参加しようとする気持ちを高めることができた。



対象児が作成した自然教室のしおり

自然教室当日は、活動場所や活動内容を見通すことができていたので、安心して活動に参加することができた。他の児童と冗談を言い合いながら笑顔を見せたり、グループで協力しながらスポーツに取り組んだりする姿も見られた。



活動中、友達と冗談を言い合う



友達の輪に入って、グループ活動に取り組む



初めての宿泊も経験できた

<自然教室後の対象児の日記>

私は自然教室で、キャンドルサービスをしました。手にろうそくを持って歌を歌ったり、ちかいの言葉を言ったりしました。ろうそくの火はとてもきれいでした。となりは、交流学級児童名さんでにっこり笑いました。良かったです。2日目はディスクゴルフをしました。ぴゅーぴゅー風が強いので、ディスクがとばされました。交流学級児童名ちゃんと交流学級児童名ちゃん、交流学級児童名ちゃんや交流学級児童名くんと私がかごに、ディスクを入れました。みんなで写真をとりました。良かったです。

【報告者の気づきとエビデンス】

1 主観的気づき

対象児にとって iPad はプラスの感情をためて、次への活力となるもの

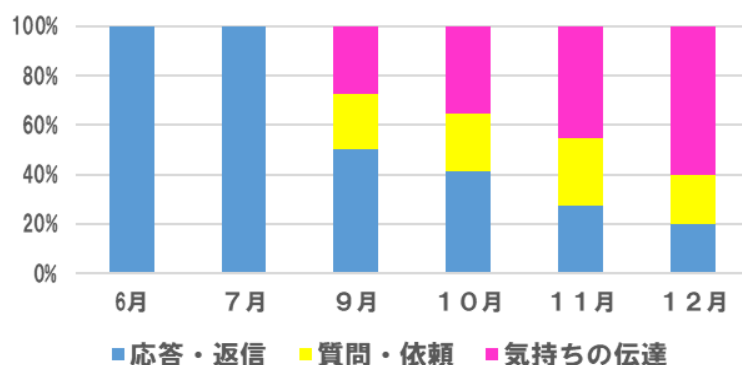
→他者とのコミュニケーションの記録・よい思い出・今後の楽しみ（見通し）を、いつでも視覚的に確認できる機器が身近にあることで、次の活動に積極的に取り組む原動力になったのではないかな。

2 エビデンス（具体的数値など）

（1）表現の幅が広がり、自分の思いを積極的に発信するようになった

教師とのメールのやり取りを通して、自分の気持ちを伝えることに慣れていった。iPadに残っている教師と保護者のやり取りを参考にして、自分なりの表現でメールのやり取りを楽しむようになった。

対象児のメール内容の変化



メールのやり取りも、母親が支援者としてモデルになっていただいた9月以降、対象児から教師に質問や依頼したいことを伝えたり、自分の気持ちを表現したりすることが増えていった。また、メールのやり取りを重ねる中で、教師を気遣うメッセージを送ったり、自分が楽しみにしていることを伝えたりするなど表現が豊かになってきた。

3 その他エピソード（画像などを含めて）

（1）交流学級の授業に対する不安感が軽減し、参加率が高まった

4年生の時には、交流学級に行く際に学習に対して不安感を訴えたり、苦手だと思ったことに対しては取り組まなかったりすることが多かった。

5年生になり、対象児が新しい活動に対しても積極的に取り組むことができるように、支援者間の役割分担を行った。それでも、環境が変わったことや交流学級担任との人間関係が築けていなかったこともあり、4月は「(支援員の) 引率がないと行かない。」「(交流学級の) 授業はやりたくない。」と話すことがたびたびあった。

学年・月	交流学級への参加状況
～5年5月	参加できないことあり 引率あり
5年6月	すべて参加・引率あり
5年7月	すべて参加・引率なし
5年9月以降	すべて参加 学習内容を見通して、支援が必要な時は自分で教師に引率してほしいと伝える

本研究を進める中で、交流学級の授業に対して不安感を口にすることが徐々に減り始め、6月以降は交流学級の授業に対して不安を示すことが少なくなった。また、初めての活動が予定されていても「やってみます。」と意欲的に参加するようになった。7月以降は引率の教員や支援員がいなくても「大丈夫。」と述べるなど、自信をもって活動に取り組む姿が多くなった。9月以降は、自分で教科や学習内容を考え、支援者の引率が必要な場合には、「交流学級の授業についてきてほしい」と教師に伝えられるようになった。

<交流学級での対象児の様子 交流学級の担任から聞き取った内容（7月）>

「きちんと全体の指示を聞いて活動することができています。難しい活動でも一声かけると頑張ってみようとしています。」

（2）苦手なこと初めてのことに後ずさりすることなく、やってみようとするが増えた

高学年に入って新しく始まったことに対しても意欲的に取り組む姿が増えた。運動会の組体操では、対象児は交流学級の担任に、「組体操、がんばってみる。」と自分から伝えた。いろいろなことにチャレンジしようとする意識が高まった。外国語活動でも他の児童と一緒に笑顔で活動するなど、意欲的な姿がたくさん見られた。



外国語活動の様子



運動会の組体操

(3) 交流学級で自分の気持ちを伝えようとする姿勢が育ってきた

より良いコミュニケーションを繰り返し経験し、安心感や自信を蓄積することができたことで、より多くの人に自分の気持ちを伝えようとする姿勢が育ってきた。11月に交流学級児童全員の前で自分の気持ちを発表することができた。

発表内容:特別支援学級で取り組んでいるスマイルプロジェクト(周りの人を笑顔にする活動)

特別支援学級での活動内容を発表し、コンソメスープをふるまった。



私はいずみひびき学級（特別支援学級）で、スマイルプロジェクトという学習をしています。これまでに、お母さんにケーキを作ったり、先生にコーヒーを淹れたりする活動をしてきました。

今日はコンソメスープを作って、5年1組のみんなに喜んでもらいたいです。



いつも支援を受ける、守られるという受け身の立場から、自主的に他者と関わったり、気持ちを伝えようとする主体的な姿勢が育ってきた。

4 今後の見通し

対象児は来年度6年生になり、最高学年として様々な場面で役割を担っていくことが考えられる。その際に、支援を受ける立場ではなく、低学年を支援する立場として行動することが求められる。今年度培った主体的に他者と関わる力を、より多くの人との関わりに広げていくことで、対象児のコミュニケーションの意欲や技能が高まることが期待できる。今後は対象児が主体的に活動できる場を多く設定し、さらに自信を高められるようにしていきたい。